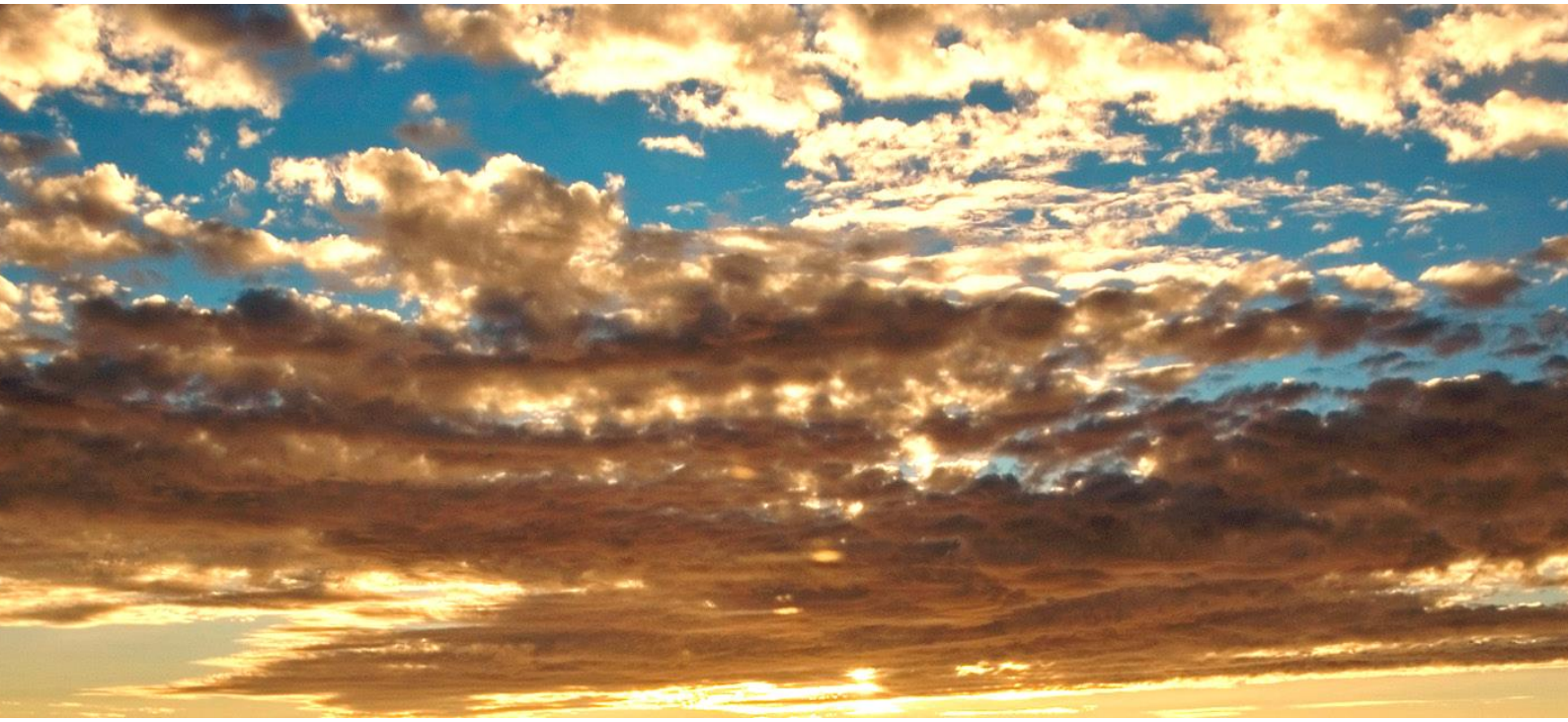

# 全国児童部会

## NATIONAL WORKSHOP

# 児童部会とは

　児童部会は約２０年前に始まりました。始まりは「小学生に特化した研修が全国的に少ない！」という声から、指導員の先生方から作り上げてこられました。当時の研修の多くは幼児や乳児を対象とした研修が多く、小学生以上を対象とした研修があまりありませんでした。

　研修が少ないと指導員同士の繋がりも狭く、他の地区の視点や考え等の意見交換をする機会も少なかったです。そこで始まったのが児童部会です。児童部会では、大阪、東京、東海地区等の学童指導員（現在では放課後児童支援員）を中心に小学生に特化した研修、情報交換の場を作ってきました。現在では学童指導員だけでなく、多種多様な業種の方が参加しています。

# これまでの児童部会

　第一回からは「自然」をテーマにした研修を多く行いました。それぞれの地域で子ども達が実際に触れ、活動している自然の場を、大人自身もその中で過ごし体感することの大切さを知る。そのうえで自然体験の必要性を指導員同士で語り合い、子どもたちに与える影響の大きさを認識し、子ども達の豊かな成長に繋げることを目的としました。

## 自然体験から地域の子ども達へ

自然体験をテーマにした研修を行ってきた後は地域の子ども達という視点の学びを多く行ってきました。どの協議会でもずっと以前から地域福祉を大切にしていたという事が当時の資料からも読み取れます。

子ども達が育つ地域を豊かにすることが、子ども達の豊かな成長に繋がる、施設に来ている利用者だけに視点、重きを置くだけでなく、同じ地域で育ちあう子ども達にも目を向けよう。そんな研修内容が多くみられました。

## 当時から変わらない仲間たち

児童部会を始めた当初から、各施設の指導員は人事異動等で交代を繰り返してきましたが、子ども達に対する思いや、私たちが大切にしている事は昔から変わっていないように感じます。人が変わっても思いは変わらず。各施設で大切なものを引き継ぎながら現在に至っているのではないでしょうか。そんな児童部会をこれからも大切にしていきたいと思います。

# 第 20 回全国児童部会

今年の児童部会は新型コロナウィルス感染防止の為、児童部会初のＺＯＯＭを利用したオンラインでの開催となりました。その中でも、大阪の会場には大地協の仲間が大勢集い、みんなで学びを深めました。

子ども食堂「あのね」の代表をされている、永田華子さんをお招きし、今、貧困等の社会的逆境下にいる子どもや家庭への支援をどのようにされているのか、永田さんの話を伺い、私たちにはどのような活動が必要なのかを皆で考えました。

子ども食堂でできる幅広い活動や枠にとらわれない支援がなぜ私たち地域福祉施設が担うことが出来ないのかを考えさせられ、勇気ある一歩を踏み出せない私たちの背中を押してくれるようなお話が伺えました。

子ども食堂『あのね』代表　永田華子さん

# 基調講演を受けて

## グループディスカッションへ

今回、永田さんの講演を受け私たちが担っている仕事への熱意が増した人も多かったのではないでしょうか。私もその一人です。様々な地域の施設が施設の中だけでなく、一歩踏み出して地域に活動や支援を広げられれば、より豊かな地域に成長できるのではないかと思いました。今回の研修で得た思いをこれからの業務の糧として生かしていきたいと思います。

毎年各地域で開催する児童部会では、その時々にある地域の課題を題材にした研修はもちろん、現場で働く指導員同士の情報交換や、私たちが何を大切にして地域福祉施設に勤めていくか等の新しい視点を作ってくれます。

第２部ではグループディスカッションを行いました。ここではZOOMのブレイクアウトルーム機能を使用して、オンラインディスカッション組と、現地に集まった大阪対面ディスカッション組の４つのグループに分かれて行いました。それぞれテーマとして、コロナウィルス感染拡大による施設の変化、コロナウィルス感染拡大によって見えた地域の課題へのこれからの取り組み、としてディスカッションしました。久しぶりのディスカッションという事もあり、テーマから少し外れたフリートークも多々見られ、様々な意見交換が出来ました。

# コロナ禍で見えた施設の変化

## ～支援員の思い～

　コロナ禍、子どもたちを取り巻く環境が大きく変わりました。マスクでの生活が当たり前になり、幼児特に乳児はマスク姿の保育者しか知らないので大きくなった時にどんな影響をもたらすのか未知数であり心配されます。

　小学生は今までできていた事が制限され我慢する日々をすごし、今しかできない活動が中止や規模縮小になるなどショックを受け「またか」と落胆し諦める姿が日常となってきました。

　このような中、施設で工夫して行った取り組み、これから進めていきたい取り組みとして屋上でスイカ割。保育所のプールを借りて毎日水遊び。OB と一緒に合宿。保護者を巻き込んだ活動。地域清掃などの取り組みを考えています。

　地域・人との関りが減ってきている中でこのような活動をやってみて初めてわかることがありました。みんな求めているものは同じであり、私たち支援員がその思いをくみ取りこれからの活動に繋げていく必要があるとあらためて感じました。

さらに地域や子ども達のニーズに対して柔軟に対応していくことが大切だとも感じました。スピードも必要なのだと。

本日の研修で「子ども食堂」の話を聞いていると、その点、施設は負けていると思いました。

施設の色々な外的要因を考慮すると、内向的な活動になってしまうし、今はコロナを言い訳にしてしまっているところもあると実感しています。

特にボランティアと仕事、お金が関わるか関わらないかで熱量が変わってくるのではないだろうかと感じました。仕事ではない方が、フットワークを軽くして動けるのではないだろうかとも感じました。

今「子ども食堂」が増えてきている現状の中“何のために活動するのか”が重要なんだと思いました。

しかし施設内の一職員の立場からフットワークを軽くして活動することはなかなか難しく、しがらみが多いと感じる時もありますが、そんなに気負わずもっとやりたい事をやってもいんだなと感じました。

# 会場とオンラインからの質問Q&A

オンラインと会場を使用しての研修ならではの進行の中で大阪からも他府県のZOOMでの参加者の方からも様々な質問が飛び交いました。

残念ながら対面での研修が出来ませんでしたが、永田さんの実践的な取り組みの講演が参加者の心に火をつけ、まるで対面のような質疑応答の時間となりました。

Q.『ボランティアで行う上でのモチベーションの保ち方は？』

A.『モチベーションの保ち方を聞かれる事が一番答えにくいですが、例えるなら山登りする人は疲れるのになぜするのでしょうか？好きだからだと思います。私もそこに似ているものがあると思っています。』

Q.『コロナ前と後で子どもや家庭にどのような変化がありましたか？』

A.『コロナ禍になり中々地域にオープンな活動が出来なくなってしまったが、ニーズはあるのでそこにどう応えていくかは考えました。皆で食べる食堂が出来なくなったので、食材を無料配布することにしました。コロナ禍でも支援が必要な家庭には繋がりの場を確保するために登録制の活動を取り入れ、月に数回の遠足等の活動を行う事で継続した関係づくりをしてきました。』

等の質問応答がありました。その他にも永田さんの講演を聞き、今後の私たち地域福祉施設職員の活動に関する感想等を伺いました。

# 児童部会アンケート

## ～ 参加者の声 ～

子ども食堂がたくさんある中で、食堂としての機能だけでなく、子どものいじめ、虐待等の心の問題、人権に迄踏み込んだ永田さんの子ども食堂の取り組みはすごい。まさに子どもの居場所であると思いました。

自分の地域で、あのような活動をやっておられることに、まずはとても刺激を受けました。ボランタリーな働きだからこそ、規則に縛られることなく、自由に今自分が必要と思うことに突き進んでいくその姿勢は私たちの本来の姿であり、大いに学ばされました。

本音で語る姿に感動しました。給料を頂く本業においても同じぐらいに取り組めたら良いなぁと思いますが、本業においてはどうしても様々な制約やしがらみがあり、理想と現実のギャップが生じることが常です。何とかそのギャップを埋めて一歩でも理想に近づきたいものです。そのことを十分承知の上で、永田さんはボランティア活動に力を注ぎ、本業では果たせない思いをぶつけられているような気がしました。

# ミライへ

「なんか、広く浅くでおわってもうたなあ～」「いつも深いところまで話がいかへんなぁ」それは、全国研修会で研究しきれず、物たりなさを感じていた指導員たちから出た言葉でした。子どものことで、同じ悩みや課題を抱えている全国の仲間たちと、もっと深め合い、高め合っていきたいという思いから第一回学童・児童館部会（のち、児童部会に名称変更）への道は開かれていきました。

研修会は、たくさんの仲間たちと語り合うということに大きな意味があり、研修というよりもセツルメントでいう人格交流がそこにはありました。

《 50 周年記念誌より 》

毎年各地域が開催する児童部会では、その時々にある地域の課題を題材にした研修はもちろん、現場で働く指導員同士の情報交換や、私たちが何を大切にして地域福祉施設に勤めていくのか等の新しい視点を作ってくれます。

今年の児童部会では永田さんの講演から私たちは施設の中だけで仕事をしている事が多いと改めて実感しました。いかに制度の枠、施設の枠を超えて地域で困っている人たちへの支援ができるのかを、日々考えて行動しなければと思います。そしてこのような活動が様々な人に広がり、支え合い、豊かな地域を作っていければと思いました。

私自身何度も児童部会に参加させて頂いてきましたが、参加するたびに他施設の指導員の方からたくさんの刺激を受けると同時に新しい視点が増え、自分が見ている世界が広がっていきます。そして何より同じ志を持つ仲間がたくさんおり、普段の仕事や生活を語り合う事で明日への活動の糧となります。私はこの語り合う時間が一番好きです。ある時は火を囲んで、ある時は段ボールの机を囲んで、ある時は深夜のコンビニまで皆で歩いたりとする時間の中で、沢山の思い出と言葉を頂きました。

全国の施設の皆様、一度この児童部会へ参加して、一緒に語り合いませんか？新しい発見や気付きがきっと見つかるはずです！この紙面を読んで頂いている一人でも多くの方と語り合える時を楽しみにしています。

# 写真で振り返る児童部会の歩み

## History of the workshop

# 児童部会これまでの歩み

| 回 | 開催年 | 会場 | テーマ |
|---|---|---|---|
| 1 | 2002 | 奈良県吉野村「山の家」 | 子どもと自然のかけ橋を |
| 2 | 2003 | 岐阜県<br>「社会館野外活動センター」 | 自然体験の中から育つ子どもの心 |
| 3 | 2004 | 滋賀県「びわ湖セツルの家」 | 生きた五感を育てよう |
| 4 | 2005 | 名古屋<br>「名古屋キリスト教社会館」 | 見つけよう街の宝 |
| 5 | 2006 | 大阪市<br>「わかくさ保育園」 | 子ども達の生きる力を |
| 6 | 2007 | 岐阜県<br>「社会館野外活動センター」 | 見つめよう子どもの世界　育もう確かな力 |
| 7 | 2008 | 大阪市<br>「愛染橋保育園・児童館」 | つながろう！子どもも大人も地域の中で |
| 8 | 2009 | 北名古屋市「ビジネス徳重」<br>こみゅにてぃはうすとくさん | 子ども達が生き生き輝く地域を<br>～自主・自治・自立<br>子ども達の地域生活のために私たちが<br>できること～ |
| 9 | 2010 | 滋賀県「びわ湖セツルの家」 | 地域の子ども達の豊かな生活・成長をめざして |
| 10 | 2011 | 滋賀県「びわ湖セツルの家」 | 生きる力を育む輪づくり<br>～夢中になれる放課後を目指して～ |
| 11 | 2012 | 名古屋緑・南<br>中央有鄰学院<br>名古屋キリスト教社会館 | 格差社会に生きる子ども達の未来を拓く<br>～子どもの今を見据え、<br>明日の希望を紡ぐために～ |
| 12 | 2013 | 大阪市　育徳園保育所<br>愛染橋保育園 | 多様化する子どもの世界<br>～子どもたちの実態に迫る～ |
| 13 | 2014 | 岐阜市<br>日本児童育成園<br>長良川スポーツプラザ | 子どもの苦しい、楽しいに寄り添い、<br>ともに生きる。 |
| 14 | 2015 | 滋賀県「びわ湖セツルの家」 | 学童保育の原点を探る<br>～子ども・指導員の今昔物語～ |
| 15 | 2016 | | |
| 16 | 2017 | 大阪市　やまと保育園<br>阿さひ保育園 | 幼児期の関わりと小学生の実態 |
| 17 | 2018 | 名古屋　熱田区<br>発達センターあつた | 改めて子どもの居場所を考える<br>～確かな力を育むために<br>大切にしたいこと～ |
| 18 | 2019 | 大阪　長居ユースホステル | 「子どもが生きやすい地域社会をつくるために」<br>子どもの権利条約を「知る・わかる・使える」 |
| 19 | 2020 | 岐阜　日本児童育成園<br>長良スポーツプラザ | 子どもたちに最善の利益を<br>コロナと共の生活にあって |
| 20 | 2021 | 大阪市　長居保育園 | 地域とのゆるやかなつながりを居場所に<br>～子ども食堂の実践から学ぶ～ |